

2009年度 こひつじ診療所事業計画

ひき続き、小回りのきく精神科、心療内科中心の診療所として、地域に密着しつつ、特色のある福祉医療活動を実践、展開していく。

1. 児童精神科、発達障がい者にも対応できる精神科、心療内科として診療活動を続けていく。1日50名以上、来院する日も多くなった。看護師（常勤1名 非常勤1名）、精神保健福祉士（2名）、臨床心理士（非常勤2名）たちと共に、日々の診察に明け暮れている。発達障がいを含めた子どもたちが多く来院し、初診全体の7割は20歳未満で、3歳前から小学校就学前の子どもたち、特に高機能自閉症、アスペルガー症候群を含めた広い意味での自閉症圏（広汎性発達障がい）にあわせて、ADHD（注意欠陥多動性障がい）を伴う子どもが多い。さらに「まきばの家」で生活している子どものような、あからさまな親からの虐待、育児放棄とまではいかないものの、保護者の子どもに対する養育の問題があり、愛着形成が希薄となり、集団生活が困難、多動などが目立つ例も多い。また、うつ状態となった方（急性期と判断されれば、できる限り早急に診察）や、統合失調症など慢性的な精神症状を抱え、通院を希望される成人一般の受診も増加している。他の医療機関に通院していたが、改善されずに当院を受診する方も多くなり、初診診察に児童症例と同じく1時間以上を要する。ホームページをみて来院される方もいる。ひき続き、必要なケースはなるべく丁寧にフォローし、成長、経過を見守らせて頂こうと心がけていく。そのためにも、医師だけでは限界があり、看護師、精神保健福祉士、臨床心理士の働きがますます大切になっている。看護師、精神保健福祉士の患者や家族、関係機関の方々に関わる力量が向上し、必要な場合には関係機関を訪問して、子どもの様子を観察しながら、職員と交流している。4月から、臨床心理士の1名が交代し、週2日より3日に勤務日を増やすことにした。
ひき続き豊かな自然、作業環境、動物たち（現在、待合室や診察室の前に5頭の羊（うち2匹が2月に生まれた双子で、まさに「こひつじ」）が放牧されている）、及び診療所内のデイケア空間を生かし、必要な受診者が日中過ごせる活動の場としてのあり方を引き続き模索していく。これまでの受診者の状況をより細かく理解、分析するために統計を、精神保健福祉士が中心となり、整理、作成中である。
2. 「こどもの家」「まきばの家」の児童、青年を診察し、フォローしているケースが増えている。ひき続き、「ディアコニア」の入所者も必要な方の診察を行い、また各施設スタッフの相談に応じていく。今年度も「まきばの家」の症例検討会（児童相談所の職員も参加）に、診療所スタッフも可能な限り参加していく。「まきばの家」以外の児童養護施設、自立援助ホーム、乳児院の職員との交流も、「まきばの家」の職員と共に深めていく。
3. ひき続き比較的小規模な地域（袋井市 人口約8万人）において、福祉・教育・医療の連携の可能性を、特に養護が必要な子どもや発達障がい者を中心に見据えながら模索していく。袋井市で、必要な子どもを、広い意味で「要養護児童」として見守り、保健センター、教育委員会、しあわせ推進課が、横断的包括的に連携するために、2008年4月より、保健センター、教育委員会、しあわせ推進課が合同して、幼児や小学生の事例検討会を年6回開催したが、今年も委員として参加していく。2007年10月に提言した、袋井市の早期療育施設の開設については、まだ袋井市が検討中である。
4. 袋井市の特別支援教育支援チームの委員長、掛川市の特別支援教育専門チームの委員長を務めてきたが、今年度も務めていく。静岡県西部の就学指導委員会の委員とあわせて、2008年より勤めた袋井市の就学指導委員会の委員も継続していく。
5. 日本キリスト者医科連盟静岡部会（武井院長が部会長）の例会を、昨年に引き続き、可能な範囲でデンマーク牧場福祉会と共催し、年に3回程度、土曜午後に講演会を開催していく。

以上